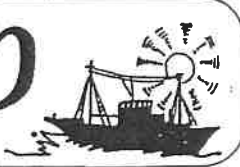


# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

第五福竜丸の被爆は熱核反応が人類に惨禍を及ぼした最初の例である。一九五四年三月一日、爆発地点のビキニ環礁から約一五〇キロメートルの航行禁止区域外で多量の被爆をし、水爆の恐ろしさの生き証人になった。乗組員は全員放射能症にかかって、その一人久保山愛吉氏は半年後に死去した。福竜丸は三月一日に焼津港に帰ったが多量の灰が降下していることがわかった。その後帰港した数百隻の漁船のマグロなどの魚も放射性汚染をされていて約四五〇トンは廃棄され、地中に埋められた。これは、わが国の原水爆禁止運動を国民的規模に発展させた。第五福竜丸がもたらした死の灰を分析して、それが水爆であることを明らかにした。またこの爆弾による海洋汚染を調査する必要から水産庁の水産講習所の練習船に五月から七月までビキニ周辺の海域を調査させて、異常に高い放射能を検出した。翌年の四月にはアメリカの原子力委員会も全面的にこの結果を認めた。

## ビキニ事件から三十七年たった

小野 周

また五月の半ばから放射能を含んだ雨が降るようになった。スカンジナビア航空の人から北極を通ってくる航空機のエンジンが放射能を帯びているという話もきいて恐怖を覚えた。放射能はますます多くなった。これは米ソなどが競争するかのよう核実験をしたためである。こうして、大気圏内核実験による大気放射能汚染はいよいよ明らかになってきた。その結果、キューバ危機の翌年の一九六三年に部分的核実験停止条約が締結された。その年から、米ソの大気圏内核実験は停止され、大気の放射能は減少したが、核兵器開発のための地下核実験はつづけて行なわれ、現在にいたっている。地下核実験による大気放射能汚染はないといわれているが、アメリカの地下核実験場近くの住民が被爆したという話は後を絶たない。住民はたびたび実験に反対の意志を表明している。また最近、ソ連の核実験場の近くの住民も核実験反対の動きをしている。地下核実験は核兵器の改良開発のために

行なわれるものである。また、核実験を行なわずに十年もたった核兵器は使えなくなっているともいわれている。もう一度地下核実験を含めた全面的核実験停止を進めるべきではないか。一旦十年間停止して地下実験を再開することは技術的には非常に困難であるといわれているから、十年の停止は核兵器の廃絶と同じことになるであろう。核実験の全面停止にも住民の意志は大きく影響する。核兵器の使用にはいっそうそれは大きい。ヨーロッパからのINFの撤去がそうであった。東アジアにはまだ核兵器が残っている。東アジアの住民ははっきり核兵器を拒否すべきではないか。北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の核査察の問題も、東アジア非核化のなかで考えるのが本筋ではないか。そうすれば北朝鮮も拒否することはないのであろう。現状でも拒否はIAEAの論理からは正当でないが、核拡散防止条約に見られる核兵器国と非核兵器国の間の不平等の矛盾がここにも見られる。ビキニ環礁上で初めて行なわれた水爆実験から三十七年経過した。ここで、もう一度考えて見るべきではないか。

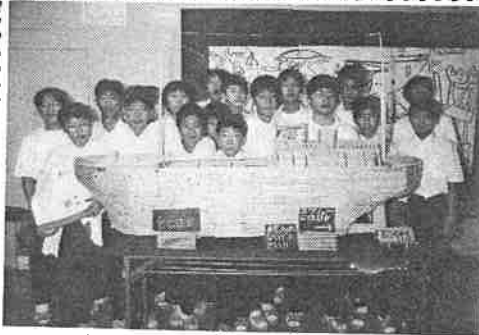
(第五福竜丸平和協会評議員)

## 秋空の福竜丸につどう 今年も九・二三に集いや句会

九月二十三日、三十七回目の久保山愛吉さんの命日に、展示館前でいくつかの集いが催されました。真っ先に催されたのは恒例の久保山忌句会の吟行。新俳句人連盟の多くの俳人が展示館前に集まり、午後からの句会のための俳句作りに励み、久保山愛吉記念碑に、りんどうの花を一本ずつ手向けしました。

### 私たちの船も航海へ

この船は、成城の一年A組の全



材料は食堂で使ったわりばしです。

十時すぎからは、東京原水協の「九・二三福竜丸のつどい」。およそ五十人の人々が記念碑前につどいました。国際政治学者の畑田重夫氏が、核兵器をとりまく現在の厳しい情勢と国民の運動の前進について報告し、福竜丸の甲板から非核東京都宣言をと訴えました。東京都原爆被害者の会の代表の訴えや、青年・学生・都職労の決意

発表もあり、地元江東区原水協の高田副会長も第五福竜丸保存の歴史をふりかえりながら、もっともつと展示館見学の輪を広げようと呼びかけました。午後は、平和と軍縮をめざす全国連絡会主催の「久保山さんを追悼する平和のつどい」。招待された第五福竜丸乗組員の大石又七さんが、被災の体験と久保山さんの思い出、手記「死の灰を背負って」出版の願いなど、切々と語りかけ、およそ五十名の青年たちが静かに

ての人が心をあわせて作ったもの。でもそのきっかけは第五福竜丸展示館に行き、原水爆のおろかさ、第五福竜丸の乗組員の悲劇から、これからはそのようなことがないようにするため第五福竜丸の模型を作ることになりました。

材料は使い捨てられたわりばしを使うため一学期から食堂で使ったわりばしをためていました。そしてまとめてきれいに洗って干しました(模型の表面の黄色いしみはカレーのしみです)。ここまでは順調にすすんでいたので、作っていくとわりばしがきれいに並ばないため、途中でこわしました。そして方法を変えて

て一から作り直しました。一回目で失敗したことを二回目では生かしながら船底を完成させました。かんばんを作るのに資料がなかった

ので、もう一度第五福竜丸展示館に行き、大石さんの模型をスケッチしてまとめ、それをもとにしてかんばんを作りました。作ることに四日間、ときには八時まで作り、文化祭にそなえ、ついに完成させました。作り上げる時、わりばしをつまみ上げていったため、その間のすきまをうめるのに苦労しました。作り上げた時は、なんともいえないうれしい気持ちでした。

午後から江東区文化センターで開かれた「第十一回久保山忌句会」は、斎藤鶴子理事があいさつし、小佐田哲男元東大教授が和船の歴史についてユニークな話題を提供し、共に句を作り、選句をしました。大石又七さんも出席し、まぐろの刺身を賞味しつつ、懇親会が開かれました。数多い作品の中、第一席には田中千恵子さんの次の一句がえらばれました。



船と碑と子がいることが地球の臍

台風十九号が近づいている九月下旬、長崎に旅をした。降りしきる雨の中を今夜の宿に向ってバスはひた走る。濡れたネオンがまたいたっている長崎の街の左右を案内していたバスガイド嬢が、「原爆ゆるすまじ」の歌を歌い出した。

あゆるすまじ原爆を  
三度ゆるすまじ原爆を  
と歌う澄んだ声はバスツアーの人々の胸にしみ渡り、誰もがじっと聞きいった。歌い終るとガイド嬢は、荷物にならないみやげとして皆さまに持ち帰っていただきたいといった。中学生や高校生の団体には、歌唱指導をしているのとこのとだった。四十六年前、広島につづいて原子爆弾が投下された長崎は、今なお原爆の後遺症に苦しむ人々をかかえた街である。

長崎の街を一望出来る高台のホテルからの夜景は、無数の真珠をばらまいたかのようであった。す

### 片脚鳥居

田中千恵子

り鉢型の長崎の街の、爆心地はああたりと指さされても、しかとは見きわめがつかない。翌日、ガイド嬢にその場所を教えられ、更に、「片脚鳥居」を教えられた。片脚鳥居とは、爆心地近くの山王神社の鳥居の片脚が爆風でもぎとられ、残った一本で四十六年立ちつづけている鳥居である。一瞬にして七万余の長崎の人々のいのちが奪われた原爆の街も、今は豊かな繁栄の中で、その傷跡をあらわにはしていない。その中で、片脚で立ちつづける鳥居の姿は、どんなに時が流れようと、私たちが忘れてはいけないものをはっきりと見せてくれる。核のない本当の平和が来る日まで、この片脚鳥居には立ちつづけていてほしいと、心から願った。

八月十一日に原爆忌東京俳句大会が行なわれ、九月二十三日には久保山忌句会が開かれた。原爆忌東京俳句大会は二十二回

を数え、久保山忌句会は十一回と会を重ねてきた。原爆忌大会のたびに、そろそろマンネリではないのかの声を耳にするが、原爆忌大会もビキニ被災でたおれた久保山愛吉さんと被爆船の福竜丸を詠う久保山忌句会も、参加することにもまず意義がある。俳句人口一千万ともいわれている俳句隆盛の昨今だが、その俳人たちのほとんどが、戦争や核のことは詠わない。戦争や核や平和といった漠然とした事柄を俳句にするのは確かにむずかしいことであるが、俳句のナショナルセンターとしての新俳句人連盟を核にして、「道標」「展」「志茂句会」などに所属する仲間たちはその困難なテーマに取り組み、すぐれた作品を生み出している。

かき水ひとつは爆死の母に置く  
補聴器の中で炎天広島は  
松坂凡平  
和田つねお

一句目は今年の原爆忌東京俳句大会の東京都知事賞受賞作品、二句目は第五福竜丸平和協会賞受賞作品である。

久保山忌句会では福竜丸の船の傷に心を寄せ、残された遺品を見



(新俳句人連盟)

て船員たちの船ぐらしに思いをめぐらし、愛吉さんの  
原水爆の被害者は  
わたしを最後にしてほしい  
と刻まれた遺言の碑の前で反核を誓い、俳句を書いた。

私の作品で恐縮だが  
焼津まで秋空一枚遺言碑  
船と碑と子がいることが地球の臍

一句目は第一回久保山忌句会、二句目は今年の同句会での作品である。未熟な俳句だが、これを読んだくれた人が福竜丸を見たい、遺言碑を見たいと思ってくれれば、と願わずにはいられない。

長崎旅行のツアーバスは亀甲店へ横づけになった。その向いに原爆資料館があった。亀甲の逸品にも魅力はあったが、私は皆と離れて資料館に向った。展示物の中に、爆風でゆがんだ柱時計が永遠の時を止めていた。

一九四五年八月九日午前十一時二分。

### 「広島」「ヒロシマ」①

僕の父は職業軍人だった

清水文裕

「職員会議に出席すべく、酒河(現在の広島県三次)みよし市西酒屋町)から広島に向かっていた芸備線の車中(中三田駅付近)で空襲に遭い、矢賀駅からは徒歩で広島駅に着いた。この時はまだ広島駅付近は燃えていなかったけれど、燃え盛る市の中心部には入ることが出来ず、分教所に到着したのは午後四時頃であつたと思う。早速所長室に到着の報告に行くと、所長は後頭部と頸部にガラスの破片を受け:」

引用文の筆者は、清水憲三。一九一一年(明治四四年)生まれ。今春、孫をつかまえて「おじいちゃん、いよいよ八〇歳だ」と意気揚々と語った。それを聞きながら、孫の父親、つまり八〇歳翁の息子は「もうそんな年齢に:」と、えも言えぬ気持ちで、若く、さっそうとしていたころのオヤジを思い浮かべていた。

文中の駅がどこにあるのかは、お暇があればJRの時刻表を開いてみていただきたい。乗車駅は三次(当時は備後十日市駅)である。「分教所」とは陸軍兵器学校広島分教所のことだ。八九年に同校戦友会興支部が発行した冊子によると、四四年六月、県立広島商業学校の校舎を借りて新設された。「借りた」と言っても、商業学校は別の建物に移転したのだから実際は旧軍の威圧で「乗っ取った」のだろう。

翌四五年六月、分教所は宮島と冒頭の文章に出てきた酒河とに分かれて疎開した。酒河の部隊は、分教所の教官だった清水技術少佐が率いた。松林を伐採し一カ月足らずで工場など六十棟を建てた、という。そして、八月六日、猛火を避け、やっとの思いで分教所にたどり着いた清水少佐は、所長の無事を確かめると、被災者

の救護に奔走した。前記の冊子「工華会広島支部の歩み」に載った清水少佐の手記を再び引用する。「軍用トラックに満載した市民被災者を校内の棧橋から大発艇で似島(広島沖の小島)の救護所まで、ピストン輸送したが、中には大発艇の帰着を待たずに絶命する者もあって、校門前の野菜畑には死者が積み重ねられる状態だった」敗戦後、清水少佐は疎開先に残り、旧軍工場の払い下げを受けて鍛冶屋を始める。帰郷しなかったのは実父母が既に死亡していたためだ。工具の購入資金は妻の実家で借金した。

四年後、五人兄妹の末っ子が生まれる。当時、農家ばかりのムラで米を買わなければならなかったのは、駐在さんと清水家の二軒しかなかった。ビキニ被災の年、再び借金して狭い田んぼを買い、初めて田植をした時のワクワクした気分を末っ子は今もはっきり覚えて

やがて末っ子は新聞記者になった。意気込んでいるのを見た先輩から「おまえは青年将校のようだ」と言われ、愕然とする。冷やかされたのか、けなされたのか、

あるいは誉められたのか分からないが、そんなことはどうでもよかった。初めて自分が職業軍人の血をひいていることを意識させられたのだ。

父の時代、日本がアジアの国々に対してどんなことをしたのか、知識としては知っていた。だが、巨大な加害構造の末端で父は単に兵器の補給・整備担当の技術者を養成しただけ、自ら進んで職業軍人になったのは貧しかったため、と考えることで自分を免罪した。

しかし、父が果たした役割は「技術者の養成だけ」と断言できるだろうか。教えるは戦場に行き、「敵」を殺すため武器の補給・整備に励んだのではないか。殺したのは「敵」だけだったのか。その技術を教えたのは:」

父の歴史があつて、今の自分がいる。職業軍人の子としての広島「加害」と、被爆二世としてのヒロシマの「被害」を自分のこととして見つめるきっかけをつくってくれた先輩に感謝している。

(中国新聞記者)